

令和6年度第3回人間文化研究機構経営協議会 議事概要

- 日 時： 令和6年11月14日（木） 14：10～16：20
- 場 所： 国立民族学博物館 第4セミナー室
- 出席者： 井上（賢）、大原、木部、栗本、小松、佐村、武田、田島、寺前、永井、永田、西谷、
広渡、藤岡、堀、前川、宮崎、望月、山極、吉田、若尾、渡部の各委員
- 陪席者： 井野瀬監事、井上監事、クレインズ日文研副所長
- 事務局： 監査室長、歴博、国文研、国語研、日文研、地球研及び民博の各管理部長、
本部事務局の総務課長、研究企画課長、財務課長、施設課長、その他関係職員

○ 概 要：

議事に先立ち、機構長から新たに就任した監事の紹介があった。また、事務局から、会議の定足数を満たしている旨の報告及び配付資料の確認等があった。

議 題：

（議事概要）

（1）令和6年度第2回議事概要について（資料1）

機構長から、令和6年度第2回経営協議会の議事概要について報告があった。

（審議事項）

（1）令和6年人事院勧告に伴う給与改定について（資料2）

宮崎理事から、資料2に基づき、令和6年人事院勧告に伴う給与改定について説明があり、審議の結果、了承された。

また、本件に関し、以下の意見があった。

- ・ 地域手当の額について、機関ごとに差があるがなぜか。
⇒ 現在は、国の規程どおりに定めているので、その差がでている。ただし、今回の人事院勧告については、そのまま受け入れるのではなく、機関ごとに定めていく。
- ・ 異動保障の延長について、これはどういうものなのか。
⇒ 異動保障について、現在は、1年目は100%、2年目は80%で行っている。今回の人事院勧告は、1年目は100%、2年目は80%、3年目を60%にするという内容になっている。

（報告事項）

（1）令和7年度概算要求の状況について（資料3）

宮崎理事、山極地球研所長及び堀理事から、資料3に基づき、令和7年度概算要求の状況について報告があった。

また、本件に関し、以下の意見があった。

- ・ 人材育成した後に、どんな職種の適合性を想定しているのか。
⇒ 専門職を想定している。人材育成と同時に、企業や自治体から研修を受け入れて、専門職のポスト確立への働きかけを行う。
- （2）令和5事業年度財務諸表の承認について（資料4）
宮崎理事から、資料6に基づき、令和5事業年度財務諸表の承認について報告があった。
- （3）第4期中期計画に係る自己点検・評価結果（令和5年度）について（資料5）
栗本理事から、資料5に基づき、第4期中期計画に係る自己点検・評価結果（令和5年度）について報告があった。
また、本件に関し、以下の意見があった。
 - ・ 目標設定においてずっと右肩上がりの計画を策定することは適当でないというのはどのような意図か。
⇒ 数値目標において、前回は上回り続けるような記載の計画は適当でないという意図である。質の向上は図っていくべきと考えている。

- ・ トライアルはどんどんすべき。一方で、失敗した後の仕組みづくりをするべき。
 - ・ 本来、評価において、質的な観点を抜いて、定量的な指標に全部置き換えて評価をしようとするのは間違いだと感じるが、定量的な評価を求められているのが現状である。その中で、どうやって質を維持できる目標を設定していくかが評価を行う上で重要だ。
- ⇒ 今期の目標については数値での目標を免れることはできないが、自由記述の部分で質的な部分に落とし込んでいきたい。
- ⇒ 評価をとりまとめるに当たって、出された研究業績をもっと積極的に機構本部に報告してほしい。今後も業績のアピールについては、より一層機構内に働きかけていきたい。
- (4) 人間文化研究創発センターの活動状況について(資料6)
- 栗本理事及び堀理事から、資料6に基づき、人間文化研究創発センターの活動状況について報告があった。
- (5) 第5期中期目標・計画の策定に向けて(資料7)
- 機構長から、資料7に基づき、第5期中期目標・計画の策定に向けて報告があった。

(意見交換)

「今後の社会と研究のつながりについて」をテーマに意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

- ・ デジタルネイティブな世代がこれから人文学に入ってくるため、情報系との連携は盛り上がっていくことが期待される。人文の地域性とデジタル、次世代、教育などのキーワードの組み合わせから社会にとって意味あることができるのではと期待している。
- ・ 若者が特定の情報だけに接して、広くいろんな情報を手に入れることが少なくなっている。その中で人文系がもっと広く認知されるためには、情報系と連携して若者にも届くような情報を発信し、社会との接点を得る必要があるのではないか。
- ・ 人文学が世の中の役に立つことが実感できるためには、データ化して活用できるようにしていくべき。
- ・ 創発センターで女性の採用が増えたことは、とてもいいことだと思う。情報の分野は女性の人材が少なく、女性人材が活躍できる場を作る意味でも創発センターで女性の採用を増やすことは大事だと思う。
- ・ 「デザイン」がキーワードになってくるだろう。研究を通じて、社会をこんな風にデザインしたい、そのためにこんなことができるということを提示していく必要がある。
- ・ 理系は、いろいろな人材を集め、その人材に合わせ、役割分担をして一つの課題に取り組んでいる。人文学もDHの発達により科学とより密接になることで、理系と同じように、人材を組み合わせで大きな課題に取り組むようになるだろう。人文機構には、これを先導する役割を持つこと期待している。
- ・ 人文知応援フォーラムでは、人文知を知ってもらうターゲットとして地方の次世代を担う人に重きを置いている。地方の未来を担うのは、民間が主導しているので、民間とどう手を組むかが課題となる。
- ・ 市民との関係と社会との関係で、DHを市民が活用できるようにすることで、研究者だけの領域ではなく、市民との共有財産になり、協働して新しい学問が作られることがあり得るのではないか。人文機構には、DHを活用した市民との協働を掲げ、市民と一緒に何か大きな課題を一緒に考え、成果をつくり出す問題提起をしていくといいのではないか。
- ・ プロジェクトを動かすときには、誰がガバナンスをどう運営していくかが大きなポイントになる。

以上